対県教委夏季要請行動

施設設備や高校入試・臨時教職員問題を強く訴える

群馬高教月報

前橋市大手町
3--10
群馬高教組
027-231-2784
ghtu@educas.jp
http://www.ghtu.org/

８月８日（火）、対県教委夏季要請行動が昭和庁舎で行われました。前半の施設設備要請は、最初に「２０２３年度群馬高教組・夏季要求書」と「職場要請書」が水田委員長から上原総務課次長に手渡され、その後、各職場から要請がありました。具体的な施設設備改善要求が多く出され、県教委も「できるところから始めたい」という姿勢を示してくれました。後半の要請は総務課・学校人事課・高校教育課の３つに分かれて実施され、熱中症対策や高校入試、少人数学級や多忙化解消、非常勤講師の不当人事など臨時教職員の問題を強く要請しました。秋の確定交渉へ向け、分会でも管理職と交渉や対話を行い、改善を求めていきましょう。

水田委員長挨拶

ビッグモーターの問題は深刻で、パワハラ、コンプライアンスを守らない、忖度ばかりで他山の石としなければならない。組合には人事の相談が来るが、不安を抱えている職員も多い。やりがいをもって働けるよう、知恵を絞っていただきたい。

桐工分会

学科改編で職員７人で教えていた内容を５人でやることになり、１・４倍の負担で大変です。校長はやれる範囲内でやれと言うが、カリキュラムとして成り立たない。生徒人数だけで単純に減らさないでほしい。地公臨を毎年していて、30～40歳になっていく。仕事をきちんとこなしている人は、正規で雇用するべきだ。施設設備が昭和年代のものも少なくない。老朽化したり不良な環境の迅速な改善を求めたい。

前工分会

学級減は学科減となり、工業教育を衰退させる。岐阜・富山などクラスの人数を減らして対応する県も増えている。工業高校の定員減を早急に実現してほしい。女性職員が増えているのにトイレは少ない、家庭科教室にエアコンがないのは何とかしてほしい。天然芝は、休日返上で芝刈りしてくれる人がいて維持管理されている。善意に頼らない抜本的な対策を講じる必要がある。

伊商分会

家庭科や理科・芸術など実習を行う特別教室でのエアコンに対する要望が非常に強い。１時間九百円の部活手当も最低賃金より低くなってしまう。時間区分の設定も含めて何とか改善してほしい。

高経附分会

全県一区の弊害を考え、クラス人数を減らしてほしい。形だけの休憩室では誰も休めない。県庁のようにソファで休めるところを作ってほしい。熱中症対策のため、体育館にエアコンを設置してほしい。シャワー室やＩＣＴ整備、エレベーターも必要だ。なぜ学校に太陽光パネルを導入しないのか不思議だ。

安総分会

外トイレの劣化がひどいので改善してほしい。被服貸与については、作業着上下とあるのでつなぎはダメと言われるなど問題が多い。夏は空調服（ファン付きベスト）の貸与も必要だ。規則を柔軟に現実的に考えてほしい。

伊工分会

修学旅行引率に伴う事後徴収は、職員負担となる学校、私費でまかなう学校と対応が異なっている。全額公費負担にしてほしい。集中豪雨時には駐車場が水浸しで長靴が必要な状況だ。排水設備を整備してほしい。

萩原書記長

参加者はいないが要請書の提出があった学校の声を簡単に紹介。１日５教科の入試日程は受検生にきついので見直すべきだ。ＢＹＯＤの採用は家計負担が大きく格差をもたらす（玉村）。年度初めから臨時教職員を頼りにするのではなく、正規教職員を増やして若者に魅力ある職場にしてほしい（高工）。個々の生徒にきめ細かく対応するためには職員加配が必要。観点別評価が入り、非常勤講師の業務も増えているので単価の引き上げを（渋工）。教室のプロジェクタを黒板の上に固定するなど、使いやすくしてほしい（前女・渋工・高経附・高工など）。持ち時間が多くて学校に余力がない。部活の外部委託を進めてほしい（前女）。

坂田さん（臨対部）

非常勤講師の果たす重要さを認めてほしい。群馬は非常勤講師が多く、清陵では約３割を占めている。非常勤講師がいなければ学校は成り立たないのに、一員としてみなされていない感覚がある。教育予算を増やしてほしい。

県教委

現場の声をリアルに伝えていただく貴重な機会となった。よく確認させていただき、受け止めていきたい。

県教委各課要請の概要

総務課

県教委から上原次長始め４名が出席し、高教組からは春山さん・湯根さん・今井会計委員の３名で要請しました。春山さんから熱中症について、顧問が突き上げられる不安もあり、県レベルで枠を作る必要があると訴えました。湯根さんからはＷＢＧＴで測定していない現場では管理職からの指示もなく、顧問任せで未然防止ができていないという切実な声が上がりました。また、非常勤講師について、春山さんから労働契約書が出ていない。コマ数に応じた報酬の説明もないなど県教委の見解と事務とのズレが大きいとの指摘がありました。最後に今井さんから千葉の高校入試採点ミスの対応について、マークシートとデジタル採点システムを導入することになったと説明し、未だ「開示に耐える採点・点検」を学校現場に求め続ける群馬県の問題点を追及しました。具体的な回答が少ない反面、十分話す時間が取れました。

学校人事課

高教組から５名が参加し、県教委側10名に要請しました。

東宮さん自身の雇い止めについて納得がいかない。事前に話がなく、３月23日に突然校長から「頑張ったがだめだった」と言われた。後任としてくる先生は物理が専門。にも関わらず、その先生が地学の授業を行う。収入面でも自分は年金支給前の雇い止めで、その先生は年金受給者。校長と県教委との間で連絡ミスがあったのか、嫌がらせか、何か別の裏があるのか。こうしたことが起こらぬよう、会計年度職員は公募選考が望ましい。

坂田さんこのような問題は表面化しなくても他にもあるはず。非常勤職員によって教育が支えられている面があることをしっかり認め、不安なく働けるよう配慮してほしい。また、今年度から現給補償されていた非常勤講師の給与が下がるのも辛い。改善を望む。

原田さん年休簿の決裁は、事務職の場合、事務長だけでよいはずだが、教頭・校長印を押す管理職もいる。違いがあるのは混乱の元なので統一してほしい。現業の正規職員を新規採用してほしい。地公臨の給料では、結婚子育ては大いに不安で、仕事は好きだが給料が安くて辞めていく人もいる。

澁谷さん自身の人事異動には全く納得がいかない。校長と県教委との間での意思疎通が不十分だったのではないか。相変わらず長時間労働の職員が存在するが、それを管理職や県教委がしっかりと把握し、改善してほしい。実際に仕事量を減らし、職員の意識改革を促すことも必要。ハラスメント根絶にはほど遠い状況で、管理職を通さず、直接現場の声をくみ上げる第三者機関が必要だ。

萩原書記長高教組が行った女性アンケートでは、以下のような様々な声が寄せられた。部活動手当を改善してほしい。病休取得時に説明を求められ嫌な思いをした。年休取得時に職員から「なんで年休とるの」と言われた。シングルでも働きやすくなるよう看護休暇を増やしてほしい。人事異動で病気があるのに遠距離通勤になり、機械のように働いている。飲み会でセクハラ・パワハラを受けた。

高校教育課

高教組から水田委員長、坂本さん、内川さんの３名が参加し、県教委側３名に要請しました。

1、高校入試について

一本化される今年度の入試で何か採点ミスの対策を講じるのか。現行のやり方ではミスを防ぐことはできない。マークカードにすべきではないかと迫りました。これに対し、対策については検討している。マークカードを導入するには予算が必要で、今年度はできないとの回答でした。また、負担軽減のため記号を多くするよう要請しましたが、記号で採点ミスが発覚したら言い逃れできない。記号と記述のバランスが大切との回答でした。

2、少人数学級について

すべての学校で30人学級を実現し、多忙化を解消してもらいたい。少子化の中で学校をどう維持していくか。地域のためにも学校の統廃合の見直しを要請しました。統廃合の問題は多くの県で工夫して対応しているがよい方法が見つからない。知恵を出していくしかないとの回答でした。

3、多忙化について

観点別評価など新たな負担が増すばかりで、教員希望者も激減している。教師を直ちに増やせないなら、各校で仕事の削減を工夫して進めるべきだと要請しました。

4、その他

ＢＹＯＤや教材費、模擬試験について検討を要請しました。いじめ問題で加害者を簡単に退学させるケースがあるが、時間をかけて指導する必要があるのではないかと問題提起もしました。中学校訪問や学校説明会についても教員の負担になっていると指摘しましたが、これに対しては必要ないものはやめるべきだとの回答で、現場任せの姿勢でした。

原水爆禁止２０２３年世界大会報告　　吉沢　勉

８月７日から９日まで長崎において開催された世界大会に参加してきました。台風の影響で羽田からの飛行機の出発が遅れた関係で開会総会の開始には間に合いませんでしたが、各国の政府や代表による核に対する発言やアピールを多く聞くことができました。核兵器禁止、核保有に対する立場の違い、核に対する依存の考え、核兵器禁止条約に対する今後の対応策等について改めて深く考え、また、考え直す多くの示唆を受け取りました。

戦争準備でなく平和の準備を、核兵器禁止条約に参加する日本を目指して数多くの団体代表者による発言が続きました。更に、特別発言として小林節さん(慶應義塾大学名誉教授)による次回国政選挙の論点として核兵器禁止条約に対する賛否を取り上げていくことが現状を変えていく一つの方法であろうと提起され、大きな拍手が沸き上がりました。２０代の活動家や学生の紹介が続き将来への継続が期待できる集会でした。

７日の夜には、全教主催の平和の集いに参加してきました。全国からの参加者と各県の現状や問題点などについて意見交換を行いました。開催県の長崎教組による世界遺産について地元ならではの豆知識を交えながらの解説紹介があり、認識を新たにしました。

到着後、台風の影響を考慮し、大会自体を１日短縮し、２日目の午後の予定を無くし、閉会集会を２日目午後に繰り上げるという連絡が主催者からありました。群馬県代表団は帰りの交通方法を検討した結果、閉会集会に参加せず帰ることになりました。航空券も急な変更のため３つに別れて帰ることになりました。その後、２つに別れて帰ることに変更となりました。飛行機の時間もなかなか決まらないなど混乱となりましたが、なんとか全員が８日中に帰宅することができました。

２日目は第４分科会の「被爆の実相を世界に-被爆者援護・連帯」に参加しました。被爆者体験を聞くのではなく被爆者支援の歴史と現状と問題点についての分科会でした。

始めに、被爆直後の病院での実際の様子から医療関連の法整備の歴史について報告されました。医療補償の大きな問題点や今後に向けての要望等について切実な声を聞くことができました。

続いて長崎と広島の被爆者からの医療体制の現状について報告がありました。年齢も高くなって一日でも早く支援が必要であること、被爆者手帳すら未だに手にできていない人が多くいること、今までに差別を恐れて被爆者であることを隠して生きてきて数々の苦しい思いをしてきていることなどが生々しく語られました。
いわゆる「黒い雨」訴訟についても、裁判的には決着したが、政府の対応に不満が残っていることや被爆者に対する配慮の欠如等についても語られました。

国外からは韓国とマーシャル諸島からの代表者が発言をしました。被爆者は日本人だけではないので共に手を携えて活動をしていこうと呼び掛けていました。また、被害者は多数存在しているのに加害者がいない核爆弾問題について戦争を開始した日本と核爆弾を製造使用したアメリカの責任を追及していきたいとも言っていました。

日程短縮の関係で各発言者の時間が短くなったこと、質疑応答の時間が取れなかったこと、発言内容が割愛されたことなど非常に残念でした。

ウクライナ侵攻に対してクラスター爆弾が非人道的な武器だとして国際的に批判されていますが、核兵器の方が圧倒的に残酷な殺人兵器であるのに、核兵器廃絶に進もうとしないことに大きな疑問を抱いています。唯一の被爆国なのに核兵器禁止条約に日本が参加しないことにも疑問を感じています。

市民段階においては、核兵器や原子力発電について反対が大多数を占めているにも関わらず国や政府が未だに核神話・核抑止論にすがりついていることに大きな疑問を抱きました。核被害の悲惨さを世界に広く知ってもらうことや国や政府に反対を強く訴えていくことが今後の活動として重要であることを再確認する大会参加となりました。日程短縮のため深い議論に参加できなかったのが心残りでした。